

《文献解題》

「アテナイの宗教」について語ること

— R.Parker, *Polytheism and Society at Athens*における儀礼と信仰 —

山内 暁子

ギリシア宗教について、歴史的に語ることができるのか。オクスフォード大学教授 Robert Parker による *Polytheism and Society at Athens* (Oxford University Press, 2005) は、『多神教とアテナイ社会』というタイトルが示すように、ギリシアの神々へのアテナイ人の信仰のありかたを、社会における実態を丹念に再構成することによって考察した書物である。以下に当該書を簡単に紹介し、その内容に触れ、冒頭に挙げた問いについて一言したい。

1

本書は、著者パーカーにとって三冊目のモノグラフ。1983年にオクスフォードへの学位論文を發展させた『ミアスマ』(*Miasma: Pollution and Purification in Early Greek Religion*)によって、著者はギリシア宗教史において確固たる地位を築いた。「ミアスマ=穢れ」を取り上げつつも、人類学的な考察によりかかることなくギリシア宗教史に貢献した書物であり、網羅的な史料調査に基づく当該書には、レファレンスが絶えることはない。穢れと浄めについては「ギリシア宗教」をその範囲とした著者だが、1996年には『アテナイの宗教：歴史』(原題は *Athenian Religion: A History*。以下では『歴史』と略す)を上梓し、前著においても明瞭であった丹念な史料収集に基づく社会像の構築を、アテナイに限定することによってさらに突き進めた。「アテナイ中心主義」に対する批判が安易になされる中で、あくまでも現存史料の集積によって道筋を立てようとする姿勢は潔い。副題に「歴史」を掲げている通り、暗黒時代からヘレニズム期までをたどる、アテナイ宗教の「通史」である。「ギリシア宗教」については、暗黒時代から英雄祭祀の発展を経て、神殿・神域の形成、また植民市への宗教の移植とポリスごとの祭祀の確立という、一連の「歴史」が想定されているが、当該書はそのような展開を描かない。著者自身が最初に述べるように、コイノーニア、つまり人と人のつながりを保つものとしての宗教が問題であり、「ギリシア」という概念上の総体ではなく、「アテナイ」というポリスの歴史を検討しなくてはならないのだ。暗黒時代から英雄祭祀への展開を出発点としながらも、各章はソロンの国制、

クレイステネス改革，ソクラテス裁判といった社会・政治的事件によって時系列化され，また「アテナイ帝国」「紀元前五世紀：新しい神々」「アレクサンドロス大王以後」など，政治的な区切りを重視した「時代」の特色が語られる。神話や神々の詳細，あるいは神と人との関係を中心とするのではなく，アテナイ社会が主役となっているのだ。

『歴史』については，アテナイ史という確固たる枠組みの中で宗教の変化を読み解く面白さを堪能できる反面，この本で扱われる宗教とは何だろうか，という疑問も抱かせるものであった。社会の中での宗教，政治と宗教。宗教とは社会構造や政治活動の背景に過ぎないのか。著者にとって，宗教史の枠組とはどのようなものか。『歴史』に続いて世に出された本書を手にした時，上述の問いに対してどのような回答がなされるのか，大きな期待と共にあった。古代ギリシアの宗教史は，政治・社会あるいは法律といった関連領域と重なる研究において成果が量産される一方で，宗教以外のテーマに絡めとられ，「宗教史」という括りが無意味となるような様相を呈している。『歴史』において大きな流れを描きだした著者が，それを超えて新たに提示する視座は，「宗教史」の枠組みを語る上でも無視できない。本書のタイトルに掲げられたのは，「polytheism（多神教）」である。著者はあまねく神々をどのように登場させるのだろうか。

「多神教」とは，古典的，かつ論争的なテーマであり，また極めて宗教的だ。「神々にあふれる世界」であるギリシア・ローマからキリスト教世界への転換が，ヨーロッパ形成の基点であることについては，疑いがないだろう。しかし，著者が目を向けるのは，「一神教」という概念と対置されるべき「多神教」ではない。polytheismとは，その字義通り「神々がたくさんいること」であり，すなわち古代のアテナイ社会そのものである。本書においては，『歴史』に引き続いて「アテナイの宗教」が叙述されており，それが繰り返し明言される。総体として他宗教と「比較」されうるような，いわゆるひとつの「ギリシア宗教」の存在を，著者は否定する。本書において描かれるのは，「古代ギリシア人」が信仰していた宗教体系ではなく，「古代アテナイ人」がアテナイ社会において実践していた儀式や慣習であることを，読者は常に自覚するように促される。著者は，従来あまりにも不用意に扱われてきた「多神教のlogic/illogic」に直面することを命題とするが，本書の内容に入る前に，「ギリシア宗教」および「アテナイ宗教」の位置づけについて触れておこう。

2

古代ギリシア史研究の最古層-つまり19世紀末から20世紀初頭-において膨大な史料集積とその整理がなされた後，「ギリシア宗教」を網羅的に取り扱う研究が現れる。20世紀半ばのM.P.Nilssonの成果へと結実する古典的な宗教史研究においては，「ギリシア宗教」を捉えることが第一義であった。古代ギリシア人自身が，そのアイデンティティを自らの言語と宗教に求めているからには，まず「ギリシア宗教」が求められるべきなのだ。古代作家に

よる神話から歴史書、碑文や考古学史料まで検討される対象は広いが、「ギリシア宗教」を信じた「ギリシア人」の存在を疑う視線は存在しない。では、地方祭祀、とりわけアッティカの祭祀という視点は問題にならなかったのか。実は「アテナイの宗教」という枠組み自体は、新奇なものではない。著者自身、自らの本に先立つものとして、L.Deubnerの *Attische Feste* (Berlin, 1932) を挙げる。『アッティカの祭儀』と名付けられた書物は、古代ギリシアの一地方であるアッティカ、すなわちアテナイというポリスの領域内で信仰されていた事柄を考察の対象とする。ドイブナーは、アッティカの祭儀を神ごとに配列する。アテナ女神のアレーフォリア祭に始まり、デメテルとコレー、ディオニュソスなど、神々ごとに祭儀が整理され、解説が行われる。アッティカの祭祀を総括した記述はなく、暦一覧が添えられ、祭儀のカatalogとしての役割を果たしている。ドイブナーの記述は、目録のようでありつつも、アテナイ宗教の全体像を捉えたものとして著者は評価する。では、ドイブナーからパーカーに至るまでを、ざっと概観してみよう。

祭儀、神々、あるいは暦ごとに記すのは、古代ギリシア宗教史研究においてはごく一般的な定式であり、多様な宗教世界をコンパクトに、容易に参照できるという利点もある。H.W.Parkeの *Festivals of the Athenians* (Cornell University Press, 1977) は、アテナイの暦へと祭儀を位置づける試みだ。『アテナイの祭儀』では、ヘカトンバイオン月に始まり、スキロフォリオン月にいたるまで、国家主催のものを中心に、祭儀が取り上げられる。アテナイの暦は祭儀に由来する名称を持つことから、公的なイベントとしての国家祭儀がアテナイ人の生活のリズムを形成していたことが分かる。一方で、暦に位置づけられない祭儀、あるいは地方祭儀は、ごく簡潔に触れられている。

1980年代以前のギリシア宗教史においては、「ギリシア宗教」とはまず国家祭儀を中心とするものであり、それを代表するのがアッティカの宗教であった。ドイブナーやパークには、地方祭儀としてのアテナイ宗教を検討し、アテナイ宗教とギリシア宗教とを個別のものとして考察する態度は見られない。このような「ギリシア宗教」（あるいはギリシア祭儀）の代表である「アテナイ宗教」のカatalogが、以降の宗教史研究の礎となったことは明らかであり、上記の二書は基礎文献としての揺るぎない地位を保っている。また、パークと同時期に、W.Burkertの *Greek Religion* (Harvard University Press, 1985; *Griechische Religion der Archaischen und Klassischen Epoche*, Stuttgart 1977) は、さらに複雑な区分のもとで「ギリシア宗教」を語ろうと試みている。ブルケルトは、「先史およびミノア・ミケナイ時代」の聖域や歴史時代との連続性に触れた後、「儀礼と聖域」においては動物犠牲を始めとして、奉納や祈り、行列や神託といった儀礼行動の詳細を取り上げる。さらに「神々」および「死者、半神、冥界の神々」では神話や祭儀について検討し、「ポリスと多神教」「秘儀と禁欲主義」「哲学的宗教」の各章は、より大きな思想的文脈において、ギリシア宗教を考察する。祭儀のカatalogにおける静態的な叙述だけでなく、ブルケルトは一部通史的な考察を導入している。しかし、煩雑な神話素や語義解釈にまで言及した結果、全体

的にその記述は複雑に過ぎ、通読を拒む事典のような印象を受ける書物でもある。

ブルケルトがカタログ的な区分を避け、「ポリス」「秘儀思想」「哲学」を背景に宗教を配置したように、関連領域とのつながりを意識し、より細分化されたテーマについての検討が、以後の主流となり、「ギリシア宗教」という大きな枠組みは、いったん棚上げされてしまったようだ。代わって近年では‘civic religion’（市民宗教）、あるいは‘polis religion’（ポリス宗教）といった、社会的な通念を根底で支えるものとしての宗教経験についての議論が散見する。R.Buxtonが編者を務める *Oxford Readings in Greek Religion* (Oxford University Press, 2000) では、「社会における宗教」「考古学と聖なるもの」「神話と儀礼」「境界的な議論」という章立てが設定されている。根拠となる史料の差異や、議論の精密さに意識的になる傾向が見られると共に、「ギリシア宗教」は実証的研究には不適切なテーマになっていたと考えられる。

では、「アテナイ宗教」はどうだろうか。先に挙げた「市民宗教」あるいは「ポリス宗教」とは、とりわけ全盛期のアテナイ宗教に冠される言語でもある。2004年に邦訳『古典期アテナイ民衆の宗教』(*Athenian Popular Religion*, The University of North Carolina Press, 1983) が出版されたJ.D.Mikalsonは、*The Sacred and Civil Calendar of the Athenian Year* (Princeton University Press, 1975) から一貫してアテナイ宗教を検討する立場をとる。祭儀カタログ的な上掲書を経て、『古典期アテナイ民衆の宗教』では文学や哲学ではなく、法廷弁論や碑文を中心に据えて、社会的価値観としての信仰の問題を扱っている。1991年にはギリシア悲劇 (*Honor Thy Gods: Popular Religion in Greek Tragedy*, University of North Carolina Press) を、また1998年にはヘレニズム時代を考察の対象とした書物 (*Religion in Hellenistic Athens*, University of California Press) をそれぞれ上梓し、2003年にはヘロドトス (*Herodotus and Religion in the Persian Wars*, University of North Carolina Press) を、続けて2004年には『古代ギリシアの宗教』(*Ancient Greek Religion*, Blackwell Publishing) を立て続けに出版している。多作なマイケルソンだが、これらの書物では「アテナイの民衆宗教」を中心テーマとするものの、性質の異なる史料ごと、または時代ごとに考察が行われ、全体を総括する作業はなされていない。また近作『古代ギリシアの宗教』は、代表的な祭儀に触れた概説的な記述が中心であり、コンパクトな入門書の体裁を超えるものではない。カタログでなく、細分化されたテーマでもなく、全体的な「ギリシア宗教」／「アテナイ宗教」像の構築は、すでにあまたの成果が蓄積された21世紀だからこそ、一層困難な作業となっているのかもしれない。

3

「ギリシア／アテナイ宗教」の研究史について概観したが、タイトルからも、そして充実した紙数と史料領域からも、本書が「アテナイ宗教」について、最も新しくかつ重要な

成果であることが予見される。Robert Parkerによる*Polytheism and Society at Athens*, (Oxford University Press, 2005) の概要を、まずは全体構成から見渡してみよう。冒頭には図像出典が、その後は21頁にわたって略語紹介および参考文献表が続く。イントロダクションの後には三部構成となっている。各章のテーマを以下に挙げる。

Introduction 序

I

- 1 Ancestral Gods, Ancestral Tombs : The Household and Beyond 先祖伝来の神々、先祖伝来の墓：オイコス（家）とその周辺
- 2 ‘Those with Whom I Sacrifice’ 「犠牲を共に行う者たち」
- 3 Places of Cult : Athens and the Demes 儀礼の場：アテナイとデーモス
- 4 International Religion ポリスの枠組みを超えた宗教
- 5 Who Prays for Athens? Religion in Civic Life 誰がアテナイのために祈るのか。市民生活における宗教
- 6 ‘Those Who Make a Profession out of Rites’: Unlicensed Religion, and Magic 「宗教儀礼を生業とする者たち」：公的に認められない信仰と魔術
- 7 Religion in the Theatre 劇場における宗教

II

- 8 Festivals and Their Celebrants 祭儀とその参加者
Annexe : The FESTIVAL *Skira* 付録：スキラ祭
- 9 Things Done at Festivals 祭儀で行われたこと
- 10 The festival Year 祭儀暦
Annexe : The *Oschophoria* 付録：オスコフォリア
- 11 Parthenoi in Ritual 儀礼の中の処女たち
Annexe 1 : *Kanephoroi* at Brauron? 付録：ブラウロンのカネーフォロイ？
Annexe 2 : Festivals for Boys : The Religious World of the Gymnasium
付録：少年たちの祭儀：ギュムナシオンの宗教世界
- 12 The *Panathenaea* パンアテナイア祭
- 13 Women’s Festivals : *Thesmophoria* and *Adonia* 女性の祭儀：テスモフォリア祭とアドニア祭
- 14 The *Anthestheria* and other Dionysiac Rites アンテステリア祭とディオニュソスの祭祀
- 15 Eleusinian Festivals エレウシスにおける祭祀
- 16 Festivals, Rituals, Myths : Reprise 祭儀、儀礼、神話：反復

III

17 Gods at Work I: Protecting the City 神々の力 I: ポリスを守護する

18 Gods at Work II: The Growth of Plants and Men 神々の力 II: 植物の生長と人間の成長

Annexe: Heroes and Heroines 付録: 男女の半神たち

Epilogue 結語

Appendix 1: Attic festivals: A Check List 補遺: アッティカの祭儀: チェックリスト

Appendix 2: Alciphron as Heortologist 補遺: 教会祝祭学者としてのアルキフロン

以上が本文構成である。続いて、項目ごとのインデックスが31頁、また文献史料と碑文史料について（完全に網羅してはいないが）、21頁にわたるインデックスがあるのは、著者に特徴的な体裁だ。アテナイ宗教の全体像を考察しようとする姿勢が十分に表れた構成で、各章の小見出しにも著者のこだわりが見て取れる。祭りごと、暦ごとの枠組みではなく、これまでの諸研究を超えてアテナイ宗教を総括するために適切な配置であろう。

では、三部構成の各章について簡単に解説を行う。

第一部では、祭祀のコンテクストに焦点が当てられる。まずは家と家族。第一章は「家（オイコス）」の現実を葬儀や墓の実態から抽出する。アテナイでは、オイコスの相続は、その祭祀の継承と同義とされていた。しかし、実地調査では個人の墓が多数を占めるなど、理念的な大オイコスと、実際に見られた家の「断片化」状況との対比が描かれる。第二章は、家の成員が祭祀によって結ばれていたこと、また公的な祭祀の奉納レリーフに刻まれた「家族像」の検討から、「オイコス」というまとまりを重視する傾向を指摘する。加えて「犠牲を共にする」ことや「祭儀を共に見に行くこと（シュンテオーレイン）」は、家や親族を超えた、さらなる社会的紐帯の確立を可能とした。

家とそこから始まる祭祀の展開に着目した後、著者は宗教的なランドスケープを描こうとする。そこで取り上げられる社会組織は「デーモス（区）」である。アッティカにおいて重要な祭祀の場は、「都市」と「地方」-すなわち「アテナイ（ポリスの中心市）」と「デーモス」であった。祭儀は基本的にこの二つを中心とし、時に二元的な（つまり都市と地方の）核をもつ祭祀も存在した。祭祀の場を共にする「デーモス成員」は、親族にも似た立場にあり、祭祀を媒介としたコミュニティの形成が確認できる。さらに第四章では、「パンヘレニック（全ギリシア的）」な祭儀や、「隣保同盟に基づく共同体」というさらに拡張された祭祀の場があること、またアテナイが他のポリスと宗教使節を通して連携を強めていたことが取り上げられる。最後に、市民が個人的に参加する祭りや、国家の神託伺いなど、多様な選択肢にも触れる。

アッティカの枠を超えた、また個人の選択肢としての祭祀参加という観点も取り上げら

れるが、著者が重視するのはあくまでも「市民生活における宗教」であることが、次の第五章によって明らかにされる。ここでは公的宗教における「権威（＝神官・役人・評議会・民会）」についての考察が行われ、アテナイにおける「宗教的権威」の両義性が指摘される。宗教的に重要であるはずの神官は、実は補助的な存在にすぎず、民会と評議会が決定機関であり、役人がポリスを代表して権限を行使する。役人の祭祀主導に「権威」の所在が求められ、同時に神官の従属性は宗教的な「権威のなさ」を示すようにも見える。民会や法廷、戦争において頻出する儀礼行為は、様々な手続きに根拠を与える宗教的「権威」を表すものであり、同時に利用されるべきものとしての宗教／神々の「権威のなさ」を示してもいるのだ。

第六章は公的ではない宗教、あるいは魔術などにかかわる人々を扱っており、やや異色の部分である。「テクネー（職業）」としての宗教は、私的なものとどまると軽視される傾向があるとしつつも、「占い」や「入信儀式」、「魔術」や「呪詛板」を検討する。呪いによって他人を拘束できるという「迷信」の存在を指摘するが、呪いのコンテキスト（誰が、誰に対して、どのような理由で呪いを実行したのか）について不分明な事例が多い以上、その検討は本書の範囲ではないとする。しかし、紀元前4世紀の呪詛板に弁論作家リュクルゴスとデモステネスが確認されること、また呪いの板の人名から、海軍の訴訟事件に関わった当事者の多さを見て取る、歴史家らしい目配りが、著者の面目躍如となっている。

「劇場における宗教」においては、宗教経験そのものを作り上げた悲劇／喜劇について検討する。演劇に登場する人間的な神々は、アテナイ人の神話知識を補強し、また神々への畏敬の念を高揚させ、さらに宗教的な経験を拡大させたと指摘する。神話や儀礼の起源は、劇場における表現によって、より明快で直接的なものとして市民によって受け取られ、吸収された。いわば「学校」としての劇場の役割を指摘する。だが、劇場における神々の姿はアテナイ人の人間的な経験を拡張したが、信仰の深化に直結するものではなかったと付け加えられる。

以上は、祭祀に参加する人々と、そのコンテキストについての検討であり、比較的総括しやすい内容であった。第二部は、一見すると様々な祭儀を中心とした構成で、伝統的な「アテナイ宗教史」をなぞらえているかのようだ。ここでは信仰の実態を正確に描写するため、著者の力量が遺憾なく発揮され、さらなる問題提起がなされているが、その性質上要約を拒むものである。著者は「ギリシア宗教」という枠組みでパントオンを描き出すのは、基本的に不可能だとする。indescribableなものとしての「ギリシア宗教」をいったん退け、著者は「アテナイ宗教」に向き合う。「アテナイ宗教」こそが、著者が誠実に描き出せると考えた対象であり、indescribableとdescribableの境界を成すものだ。史料ごとに丁寧な検討を行い、祭儀の概要が様々な細部から構成され、全体像が提示されるが、それに続いて自説と矛盾する史料や事例についても逐一検討が行われている。自らのdescriptionに史料を引き寄せず、仮説を仮説のままにとどめるためのスペースを常に確保することが、著者

の基本姿勢である。第一部と異なり、章ごとの総括は難しい。甚だ簡略化されたスケッチとなるだろうが、以下に記すこととしよう。

はじめの三章においては、「祭儀とその参加者」「祭儀で行われたこと」「祭儀暦」が取り上げられる。しかし、これらはカタログ的／伝統的なギリシア宗教史の試みではない。付録において取り上げられたスキラ祭とオスコフォリア祭は、子細に不明な点が多い祭祀であり、どの神に捧げられたものかが議論となっている。著者はこの考えが「ひとつの祭儀には、ひと柱の神」という先入見に基づくものだと批判する。祭儀とは、特定の目標に向かい、一連の諸儀礼によって導かれる総体的な経験である。アテナイ人の宗教経験をj知るためには、「通過儀礼」や「年周儀礼」への分類作業は無意味であり、祭儀を理解するためには先入観による思考中断を避け、知られているあらゆる祭儀、あるいは知られているあらゆる儀礼について、不断の描写が必要である。著者は、かつてないような厳密な態度をもって、祭儀の詳細に立ち入ろうとする。史料に出現する事例をたゆみなく描き出すことによって、アッティカの宗教とは何か、という問いへの回答が可能になる。これが、著者の見通しである。

「ギリシア宗教」を代表するものとして、あるいは単に「アテナイ宗教」の実態として、祭暦や神々のカタログを提示することで事足りるとしていた時代からは隔世の感があるが、これこそが現時点で著者の考える誠実なアテナイ宗教史像である。まず、アテナイの祭儀には「全員参加」「男性のみ」「女性のみ」「市民のみ」などの参加条件が存在する。これは‘festival license’として市民社会の構成に関わる宗教的機能だが、祭儀という経験においてはあらゆる逆転が想定される。市民を排除した女性だけの祭り、市民同士は互いに沈黙して酒を飲むが、一方では奴隷には無礼講を許すこと、あるいは若者が女性の服装をまとうことも秩序の転倒を示している。祭りで行われた儀礼行動としては、行列・犠牲式・集団での舞踏、また競技もそのうちに数えられ、犠牲式の後には共食（シュンボシオン）がつきものであった。核となる儀礼行為は動物犠牲だが、著者は「牛の殺害」を端緒とし、犠牲式を穢れの共有と位置づける「ブーフォニア」の神話縁起を考察し、供儀を共同体と文化的生活の支えとみなす。

さらに、祭儀は暦の中に位置づけられるが、それは季節の移行や農業暦と深く関わっている。農作業のサイクルと儀式の関わりについて一通り触れた後、儀礼による穢れと浄めの対比によって時の経過が強調されていたことが指摘される。アテナイ人は取り立てて「新年」を祝うことはしないが、祭儀には新たな始まりと、それに伴う浄めの観念が伴っており、アンテステリア祭によって春が、タルゲリア祭によって夏が始まるといった感覚が共有されていたのだ。簡単に取りまとめたが、詳細を見れば祭儀ごとに様々な議論があり興味深い。これらが以下の各章で個別の祭儀を検討する際の共通の前提となっている。

第11章「儀礼の中の処女たち」においては、未婚の少女（パルテノイ）の儀礼についての整理が行われる。アリストファネスの『リュシストラタ』638-47は、女性たちに一連の

「通過儀礼」があったことを予想させる記述として有名である。しかし、著者が尽力するのは「通過儀礼」的な要素を意図的に抽出することではなく、史料に現れた儀礼と祭祀の再構成であり、またそれらが確たるものか判断することである。結果として、アリストファネスが挙げた中心市における大パンアテナイア祭の花形カネーフォロイなどの華やかな宗教的役割ではなく、アテナイ近郊ブラウロンの聖域における「熊（アルクトイ）」に著者は着目する。多様な神話素や考古学史料を検討した上で、著者はギリシアの宗教儀礼において、イニシエーション的な要素を含むのは「熊」の儀礼だけであったと結論付ける。さらに「熊」に対応する少年たちの通過儀礼が存在しないことに疑念を呈しつつ、これまで宗教史の枠組みではあまり取り上げられなかった、ヘレニズム時代にかけて隆盛を見るギムナシオンの祭祀が検討に値するのではないかという見通しを付録において提示している。

第12章のテーマ「パンアテナイア祭」は、アテナイの守護神アテナ女神を祀る祭儀であり、その重要性においても、史料の豊富さにおいても、他の追従を許さない。パルテノン神殿の彫刻群や、四年に一度の国際的な大祭である大パンアテナイア祭についての史料など、ギリシアの祭儀の中でも最も認知されているもののひとつだろう。「パンアテナイア祭」という項目について語ることは無数にあり、本書でもかなりの記述が費やされる。ただし、中心となるのは儀礼の仔細と由来に関する考察であり、近年とみに議論が活発な「市民宗教」あるいは「ポリス宗教」の要としての政治史・社会史的な機能ではない。パンアテナイア祭の「宗教的意義」-例えば、市民の統合、豊穡の祭祀といった辞書的な意味付けを儀礼の詳細から検討することもできる。しかし、パンアテナイア祭においてアテナイ人が得たものとは、入り組んだ儀礼の実践にのみ宿っており、それらを別の次元において総括すべきではない。祭りとは、複雑な経験の総体であり、言葉で解体すべきではない。これが、著者がパンアテナイア祭を考察する際にとる態度である。

パンアテナイア祭と同様に、他の諸祭儀についても綿密な史料整理と仮説の提示が試みられる。男性と女性が異なる祭祀を持っていた事例として、第13章では「女たちの祭儀：テスモフォリア祭とアドニア祭」が取り上げられる。すでにM.Detienneによる構造主義的な説明がなされている両祭儀について、著者は歴史的な視点からの再構成を行う。構造が先行するアプローチではないため、ドゥティエンヌが提示した様々なシンボリズムに見る明確な対称性は退けられるが、かえってアテナイの女性たちの宗教体験の重層性が想起される。市民の正妻に限定されるテスモフォリア祭とあらゆる女たちが参加したアドニア祭の対称性は維持しつつも、著者は歴史的に実証すべき細部を忽せにしない。テスモフォリア祭においては「性的抑制に根ざす豊穡」が象徴的に表され、また「欲望の対象となる」若い神アドニス（アドニス）の祭祀では女たちのコミュニタス（*communitas*）が実現される。この結論は、アテナイ社会の欲望の両義性について、著者の鋭い目線を明らかにしたものである。

国家祭儀だが、謎に満ちた儀礼の集積として「アンテステリア祭と様々なディオニュソス神の祭祀」が第14章で取り上げられる。まず考古学史料として常に取り上げられてきた

陶器「コエス」は、祭儀のコンテクストに位置づけることができず、ディオニュソスに付き物の女性信徒の姿もアンテステリア祭に認めることはできない、との指摘が続く。史料に誠実に向き合うことで、安易な連想が克服されており、神話や悲劇によって固定されがちな神の役割について、さらなる検討の可能性を示唆する。また、陶器画の表現は「社会的想像力」の産物であり、実際の儀礼に直結しないことに注意を促し、アンテステリア祭における諸儀礼の対立と両義性は「浄め」のために「穢れ」が存在すべきであったことに起因するとの仮説を提示している。「市民宗教」的なディオニュシア祭のファロスや儀礼的な異性装など、セクシュアリティに関わるディオニュソス神だが、自らは「ソクラテス的」に超然とした神格との指摘も興味深い。

「エレウシスの諸祭儀」においては、最も有名な「エレウシス秘儀」のみを注視するのではなく、エレウシスのその他の祭儀－エレウシニア祭、ハロア祭、プロエロシア祭も考察される。秘儀の中心神格であるデメテルとコレーが取り上げられるのはもちろんのこと、プルートン（ハデス）に始まり、エウプーロスやデモフォンなど儀礼のための半神たちに至るまで、多様な神格が列挙される。かつて行われていた「祭儀」、「神格」ごとの区分を排除することによって、「アテナイの」一地域である「エレウシスの」宗教体系が、そこから明らかになってくる。秘儀自体についても、聖所テレステリオン（テレス）の構造や、「来世での幸福」を願う宗教観の検討が行われる。ギリシア人の信仰は本来「来世」について確たる概念を持たないが、エレウシスの「来世」観は入信者と非入信者の境界を作り、入信者には「良いこと」が、そうでなければ「悪いこと」が起こる。単なる神話とはいえない、哲学的・オルフェウス教的な善悪の価値判断が生まれたことは、エレウシス秘儀の教説が持つ独自性を示している。

第16章「祭儀、儀礼、神話：反復」は第二部の総括として、祭儀における儀礼の重要性を確認する。三者はあまりにも互いに重層的に結びついているために分析しやすいものではない。しかし、アテナイ人にとっては、語られる神話ではなく、自らが参加する儀礼こそが神話へと回帰するための宗教的経験であり、祭儀はそれを集合的なレベルへと高めるものであった。第二部において、様々な祭儀の実際が取り上げられた後の考察は説得的であり、「アテナイ宗教」を構成する実体として著者が提示した像が適切であったことが想起される。

ギリシアの神々のパンテオンを構築することは不可能であり、多神教世界をindescribableと定義した上で、著者は改めて独自のアプローチを第三部において試みる。従来のモノグラフにありがちな、ある神単独の定義－ディオニュソス＝植物神、あるいはアテナイの国家守護神としてのアテナ女神－をしりぞけ、パンテオンの一員としての位置づけが適切だとする。つまり、独自の権能を保有する神々のチームを想定し、そこに帰属する神々を列挙する、という方法だ。ここでも著者は、神々ではなくアテナイ人の存在を前提とする。ポセイドン・ヒッピオスとアテナ・ヒッピアは、「馬」に関する領域を司るポセイドン

とアテナである。ポセイドンとアテナは、なぜ馬に結びつけられるのか。著者は、この二柱の神の性質が、どのようにして「馬」の属性と関わり合うのかではなく、アテナイには「馬」に乗る騎手たちが存在し、騎手たちの儀式を行う必要があったという事実を目を向ける。アテナイ人が儀礼を必要とし、儀礼が神々を必要としたのである。

アテナイ社会という枠組みを強く意識し、また神々の現れる領域は多様だと前提しながらも、神々の行動あるいは介入には特徴があると、著者は示唆する。神々の属性は、「ヒッピア」などの添え名によって端的に示されるものではない。アテナ・ヒッピアの側面を持つアテナ女神の核とはmetis（知恵）であり、それがアテナと他の神々を分かちものである。また、神々を人格神として神話レベルでとらえる場合と、祭祀レベルにおいてとらえる場合の相違についても著者は自覚的である。祭祀においてのみ存在する神の権能や、儀礼にのみ登場する劣格の神々（とりわけ、宗教暦で犠牲を捧げるリストに列挙される神々や半神）はこれによって説明できる。神話と祭祀、あるいは儀礼は補完し合っているながらも別個の存在である、という指摘は、第二部における考察によっても、裏付けられる。

また、序で触れられた「多神教はlogicを備えたシステムなのか」、そのlogicによって拡大したのか、という問いに対しての回答が提示されている。これまでつぶさに取り上げられてきた事柄からも明かなように、ヘシオドスによる『神統記』のようなlogicに基づいて地方の神々が存在するようになったわけではなく、その分布は論理的には説明不可能である。抽象的な思考に依拠したシステムとしての多神教は、再び否定される。祭祀、すなわち儀礼の実行による経験的なmappingにより、ギリシアの神々（＝パンテオン）は実体を与えられたのである。具体的には、二つの領域-「ポリスの守護」および「植物と人間の生長／成長」-に基づいて、著者はパンテオンの構成を試みる。緻密で網羅的な第二部の叙述に比べると、かなり簡潔なやり方で神々の領域が示されるが、諸祭儀におけるアテナイ人の宗教経験を考慮した上でのパンテオンの提示は、十分に説得的なものとして理解できる。

「ポリスの守護」に関わる領域としては、「アクロポリスの神々、ポリスの守護神」に始まり、「戦争」「政治生活および交易」「知恵と工芸」、さらには「海と地震」「健康、治癒、邪悪なものの忌避」が挙げられる。ギリシアの神々は、多くのカテゴリに位置づけられるのが常であり、例えばアテナイの国家守護神であるアテナ女神は、最後の二つを除くすべての領域において権能を保持している。反対に、健康や治癒の半神アスクレピオスやアンフィアラオスのように、限定的な領域を司る下位の神格も存在する。第二部で取り上げられた諸祭儀は、国家暦の中に固定され、様々な社会集団ごとに経験されるものだが、あらゆる領域に偏在する神々や半神への信仰によって、アテナイ人の日常的／個人的な必要が満たされていたことが示唆される。

第18章では「農業」「富を与える神々」「子供の養育者」「妊娠、出産、結婚」というカテゴリが与えられ、祭儀ごとに検討された神々の権能が再び権能ごとにつまり、アテナイ人

が神々を必要とした場合ごとに整理されている。最後の「アテナ女神と「その他の神々」」においては、アテナ女神がアテナイにおいて他の神々に対して優位を保っていたことに触れつつ、多神教というシステムについて著者は次のように規定する。神々はあらゆる領域に進出することが可能であり、ひとつの領域に多くの神々が存在することもある。構造主義は、神々がそれぞれ独自かつ最善の解決法をもたらす場合を想定したが、現実はそのほど明確に割り切れるものではない。アテナイ人女性が妊娠して不安を抱えている時、彼女がアルテミスに奉納するのか、あるいはアフロディテの聖域を訪れるのかは、彼女が持っている伝統的な神話の知識に左右されるだろうが、結局は個人の選択なのである。

4

神々と祭儀の一覧や事典ではなく歴史を、表面的な語義の説明ではなく儀礼と祭儀の実態を明らかにすることが、本書の目的であった。興味深い記述にあふれてはいるものの、不思議に淡々とした描写が続くのは、著者の特徴かもしれない。一見あっさりした著述に含意された意義を、ふと見逃していることもあるだろう。実際のところ、この書物を細部に至るまで理解したという実感は、まだない。史料の中の儀礼を通じてアテナイ人の宗教経験に思いを馳せる時、まさにその時に再び *illud tempus* – 原初の時間 – へと、私たちがアテナイ人と共に身を置くことになるのかもしれない。著者は多神教が社会において持つ意味に自覚的である。あらゆるものに浸透し、一体化しているが故に評価しにくく、何が重要なのか分別できない難しさ。反対に、あらゆることに刻印された神々の姿、あるいは儀礼を重く捉えることもできる。しかし、著者は多神教という概念ではなく、アテナイの様々な神々が現れる姿をとらえることによって、歴史学的に誠実な立場へと私たちを連れ戻してくれる。アテナイ宗教を歴史的に、そして真摯に取り扱う時、その試みは「宗教」という枠組みを超えて、アテナイ人の行動を想起させるものとなる。宗教は社会に埋没してその意味を失うことによって、人々に浸透することもある。教義のない宗教、儀礼行動を実直に執り行うギリシア人の社会へと、本書は私たちを導いてくれる。indefinableなものをdescribeしようとする著者の試みは、壮大な仕事を沈着冷静に遂行したものとして、人々を引きつける魅力を持っている。「ギリシア宗教」は語るができないが、「アテナイ宗教」を語ることは、著者によって見事に敢行されたと言えるだろう。

著者は最後に「なしとげられた」というギリシア語を掲げる。確かにこの書物において「なしとげられた」ことは大きい。「ギリシア宗教」について語ることはできなくとも、私たちは「アテナイ宗教」について語られたものを得ている。宗教儀礼の実践は、アテナイ社会を安定させ、神々の意志はポリスの発展と同調し、信仰と愛国心は一体化した。本書が「アテナイ宗教」を語ろうとする者に与えた恩恵は限りない。しかし、著者が第Ⅱ部において投げかけた疑問は、これから個別研究の進展によって究明されるべきであるし、例

えば国家の祭儀として隆盛したエレウシス秘儀が、国家を支えるembedded religionである一方で、自由な立場で選択できるelective cultとして、アテナイ社会を超えて継続することとなったように、「アテナイ宗教」を語ることができるならば、「アテナイ宗教」に対する考察は、ここから拡張されねばならない。「アテナイ宗教」を、あるいはアテナイ人たちの敬虔を本当に生き生きと描くためには、本書という大きな礎の上に、築かれねばならないことは、さらに多い。